

ブドー酒に農薬を 入れたのは誰か？

美和 勇夫

愛人(ヤスコ)との関係が、ばれて妻に激怒され、その愛人が別離をくちにしたとき、はたして奥西勝(三十六歳)は、清算のため、二人を殺害すべく、ブドー酒に農薬を入れ、自分だけ、のうと生きようとしたであらうか？
(一般に、男はそんなもったいないことをするであらうか？)

妻が(女に手をかけず)夫のみを殺したとか殺そうとした犯罪がいくつあったらどうか？
それらの比率はどのようになっているのか。
そういう犯罪の心理研究がされたことはない。

古来、「蛇の道はへび」といい、同類のものがする行動は、同類の者には容易に推知できる。
こういう場合は、そういう「修羅場」をくぐった、実際に体験した犯罪者に、そのときの行動心理を尋ねるに限る。

一時の狂気で死ぬるほどの愛欲の嫉妬にかられた者、人をあやめ殺すほどの憤怒にかられた者が、そのときの異常行動、異常心理を一番よく知っているはずだ。

たブラジル人兄弟を逮捕したが、そもそも二人の巡査がいて拳銃を奪われ、その後の市民への警戒、犯罪報告においても大失態をやらした岐阜県警が、静岡県まで独自捜査のあみを張って独力で犯人を逮捕できたとはどういえることではない。外国人犯罪者グループの仲間割れか、それなりの道スジ(蛇の道)からの情報提供(チンコロ)があつて逮捕できたに決まっておろう。

従つて「極悪人の裁判」に新風をふきこむといつて、やる気も能力もない一般人をクジ引きで選ん

でおつたのでは話にもならない。大体、現行の日本の刑事裁判官にしてからが、本心は皆そんなシロートと席で、裁判などやりたくはないのである。「上官の命令は陛下の命令」と同じで、政府が決め、最高裁がやれというからしかたなくやろうとしているだけに過ぎぬ。それにしても冤罪者にとつては問答無用、「強権訴訟」「なんでも有罪」の裁判官よりは、ドシロートの判断の方がましと

いうことはありうることである。(筆者は多治見市上野町在住)